



新型コロナウイルス感染症は気温の下がる冬場に感染が拡大すると言われていましたが、連日の報道によると、大都市を中心に感染者数が連日過去最多を更新しています。今後、政府が経済活動と感染防止策をどのように両立していくのか動向を見守る必要があります。保育園では、職員会議等密になりやすい環境下では短時間で終わらせるようにしています。保育にあたっては、これまでマスクを着用していましたが、保育者の顔の大部分が覆われ、子どもにとって保育者の表情が読み取れない状態にあります。新型コロナウイルス感染症が流行し始めた頃から、マスクの着用の功罪について考えていました。大人の表情から感情を読み取るトレーニングをしている乳児にとって顔を覆い隠すマスクの着用はどうなのかということです。先日、京都大学大学院教育学研究科の明和政子先生の「コロナ禍のヒトの育ち」をテキストに園内研修を行いました。「新しい生活様式」により加速する環境変化に対応しつつ、生物としてのヒトの育ちの前提を忘れずに模索し続けたいという観点から今後の対応を考えてみたいと思います。ヒトの育ちは、次のような特徴があることを知っておく必要があります。

- (1) ヒトを含む哺乳類動物は、他者(養育者)との身体接触なしには生存できない
- (2) 乳幼児の脳発達には、他者と身体接触する経験が不可欠
- (3) 乳幼児期の環境体験は、その後の脳と心の発達に直接的に影響する

**乳幼児保育とは人類の未来(ヒトの脳と心)を左右する極めて重要な責務を担う営みである。**

コロナ禍がなかった頃は、身体的接触は当たり前のことでした。むしろ0歳児のように抱っこを求めてくればそれに応じ、コミュニケーションを取りつつ信頼関係を育んできました。感染拡大が進むにつれ、蜜を避けることから身体接触をためらうようになったことは確かです。しかし、ヒトとしての育ちを保障する保育現場にあってそれでよいのかという思いがあります。特に(3)のその後の脳と心の発達に直接影響するとなると、コロナ禍以前の保育に戻す必要があります。また、マスクをした他者との日常経験がもたらしうるリスクとして、次のように述べています。

**脳発達の「感受性期」**…乳幼児期は環境の影響を特に強く受けて脳内の神経ネットワークが形成される「特別な時期」です。

**視覚野**：生後8か月頃から、表情認知にかかわる神経ネットワークが経験により顕著に変化していきます。他者の動く表情を日常的に目にする経験が乳児の表情認知を促進します。他者の表情を認知し、模倣し合うことにより「共感する心」を発達させていきます。

現在、感染防止策として各クラスでは「消毒、換気、丁寧な手洗い」を徹底しています。また、保護者の皆様にも消毒、検温等のご協力をいただいています。今後は、園内にウィルスの侵入を防止するために乳児棟、新幼児棟玄関での体温測定を保護者の皆様、来園される皆様にお願ひすることとします。現在は、手のひらをかざすタイプの検温器を備えてありますが、顔表面温度を測定する機器を用意します。また、保育教諭は、基本的に透明マスクをかけ表情が見えるようにします。保育の充実と感染防止を両立し、より豊かな実践を行っていきます。ご理解とご協力をお願いします。

園長 平野弘和